

「ウナギ文」論争の疑問

島田昌彦

1 はじめに

「ボクハウナギダ」という奥津敬一郎（敬称略 以下同じ。）が名付けた「ウナギ文」は、国文法の指定・断定の助動詞では、説明不可能とし、西洋論理学や西洋文法でいうコピュラ説、「ダ」を述語代用形と解決する説、「ノダ」説、分裂文説などが提案され、それぞれがまた新しく派生した説を生み、「ウナギ文」は、ここ十年間ほど、国語学界をにぎわしている流行語と称すべきものとなっている。問題提起者である奥津は、これまでの学説を整理し、昭和56年5月雑誌「国語と国文学」〈東京大〉の「文法研究の諸問題」の特集号に「ウナギ文はどこからきたか」という論文を発表した。

ここで奥津は、これまでの諸説を

I 述語代用説

II ノダ説

III コピュラ説

IV 分裂文説

の四種に分類し、それぞれを点検し、自説の「I 述語代用説」が最も優れたものと自賛している。

奥津が昭和40年に、雑誌「日本語教育第6号」に発表した「『ダ』による述部代用化」という論文を読んで以来、筆者も「ウナギ文」にまつわる様々な見解を検討してきたが、いずれも納得しがたく、この小論は、これまでの諸説の疑問点を詳説するとともに、新たに「呼応文」説を提案するものである。なお、論述は、前掲の奥津の論文「ウナギ文はどこから来たか」に掲げる学説の順に従い、まず、奥津の学説、次に、奥津の範疇に入ると思われるI述語代用説、続いてIIノダ説、IIIコピーウラ説、IV分裂文説を取り上げた。

2 奥津の述語代用説の疑問

奥津は、述語代用説を次のような変形規則として取り上げている。

①

(1) 「ダ」による述語の代用

$$\begin{array}{l} X \left\{ \begin{array}{l} NP \\ DP \end{array} \right. C \left. \right\} Y \text{ Pred Tense} \quad \Rightarrow \\ X \quad Y \left\{ \begin{array}{l} NP \\ DP \end{array} \right. C \left. \right\} d \text{ Tense} \\ NP \quad C \quad \text{マダハ} \quad DP \text{ へ焦点。} \end{array}$$

この規則の中のX、Yは任意の数の連用成分、NPは名詞句、Cは格助詞、DPは副詞句、Predは述語(の語幹)Tenseは未完了または完了の時制詞である。このような文の中のNP、CまたはDPが焦点である——いいかえれば他のX、Y、Pred、Tenseが前提である——場合に、前提の中のPredが「ダ」の語幹のかわり、焦点が「ダ」の前に来るという変形で

ある。これを例示すれば次のようになる。

(2) (君は何ヲ食ベル)

ボクハ ウナギヲ 食ベル
 ボクハ ウナギヲ ダ

XとYはゼロでもいいし、文がとり得るかぎりの連用成分であってもいい。従って次の例文のように、焦点である「総裁」以外に四つの成分をとるものも可能である。

(3) 来年 福田サンハ 党大会デ モウ一度 総裁ニ 選バレル

来年 福田サンハ 党大会デ モウ一度 総裁 ダ

またXとYとがゼロである場合は次のようなものである。

(4) (窓をあけて外を見るとき「雪ト雨ト ドチラガ 降ッテイルカ」というような前提のもとで)

雨ガ 降ッテイル
 雨 ダ

つまり「降ル」のような結合価1の自動詞の場合、必要な成分はこの文の焦点となっている主語の「雨」だけで、他の連用成分はなくてもいい。

このように、XとYとがゼロでもよく、二個以上の連用成分でもいいということは、述語代用説以外の説に対する反論の根拠の一つになる。つまりウナギ文を含めて「ダ」型文は、一般に「AハBダ」というように「A」と「B」の二項目をとると考えられているが、必ずしもそうではないのである。

奥津は、ここで「(君ハ何ヲ食ベル)」という前提条件を掲げて論述している。また、自らの解説でも「例えば『君ハ何ヲ食ベル?』のような前提があれば『ボクハウナギヲ食ベル』と答えるかわりに『ボクハウナギダ』で済む。」(前掲「国語と国文学」76ページ)と「前提があれば」と述べている。ということは、①に示されている(2)と(4)は、前提を条件とすることによって、同種類のものとは判断できるが、(1)の変形規則並びに(3)の五つの連用成文をとるものの例は、特に前提を条件とはしていないので別種のものであることは、まず指摘し得ると思われる。

右のことを具体的に述べれば、(2)と(3)を比較すると、(2)は「ウナギヲ食ベル」が「ウナギヲダ」となり、(3)は「總裁ニ選バレル」が「總裁ダ」で助詞の着脱に相違がみられ、(2)の場合は、述語代用と称することが可能だが、「(3)来年福田サンハ党大会デモウ一度總裁ダ」は、「總裁ニ選バレル」の述語代用というものではなく、「ダ」は「来年 福田サンハ 党大会デ モウ一度 總裁」というすべての言葉をうけて、「總裁ニナル」という意味を持つ。より細かく繰り返すと、「ダ」という助動詞は「總裁」という名詞のみと関連するものでなく、時枝文法の入子型構造で示せば

来年福田サンハ党大会デモウ一度總裁

ダ

となり、「ニ選バレル」とは、無関係である。この点は、「ボクハウナギダ」の場合も同様で、これを入子型構造で示せば、

ボク

ハウナギ

ダ

と基本的には、理解されるべきものと思う。

国語の文に対する正当な理解が欠如したものとして、(4)の変形を、その一例と考えられる。すなわち、奥津は、「雨が降ッテイル」と「雨ダ」を同じ意味内容を持つとするが、「雨ダ」とは「まさに雨が降り出した」ということで「雨が降ッテイル」とは全く異なる。ここでの「ダ」は、雨が降ってきたという強調が原義であって、奥津のいう「雪ト雨トドチラガ降ッテイルカ」の前提では、「雨」「雨ヨ」「雨デス」「雨ガダ」でとどまり、「雨ダ」には至らない。百歩譲って「雨ダ」と述べた場合、その発言者が改めて「雨が降ッテイル」ことに気付いた表現で、「雨が降ッテイル」の「ガ降ッテイル」の代用とは考えがたい。

奥津は、(2)では「ウナギダ」と「ダ」とし、(4)では「雨ダ」と直接「ダ」を「雨」に接続させる。「雨ダ」と「雨ガダ」、「ウナギダ」と「ウナギダ」とは、いわゆる「てにをは」の有無で意味内容が非常に異なる。「てにをは」の有無を無視した奥津の論述は、国語の意味内容を無視したもので、国語の文法とは称しがたい。

①に示された、(2)、(3)、(4)のいずれの例も、意義上から判断すると、述語の代用と称すべきものではなく、述語部分を省略し、残されたその他の部分を凝縮して強調するために「ダ」を添加したもので、次のような伝統的な国語の表現にしばしば見られる「ダ」の用法であると判断できる。

向田邦子の随筆『眠る盃』へ講談社文庫の「眠る盃」の項に、

東京の地名に「札ノ辻」というところがあるが、妹は「辻の札」と思い込んでいて、

「さあ、どっちだ」

とせき立てて聞くと、白目を出して慎重に考えたあげく、「辻の札に決まってるじゃないの」と間違えている。

(19ページ)

とあるが、「さあ、どっちだ」は、「さあ、どっちが正しいと思うか、考えていいなさい。」ということ、上記のサイ

ドライン部分を省略し、「ダ」で「どっち」を強調したと考えるのが最も穏当と思われる。そして、「どっち」という体言には、「札ノ辻」「辻の札」の二つの名詞句が「札ノ辻か辻の札の」という形式で文脈上関連していることは、いうまでもない。

②

更に奥津(一九七) P. 33では、「ダ」がその補語——「ダ」の前にあるNP(○やDP)——をとらない場合を述べた。いわゆる接続詞の「ダカラ」「ダケ(レ)ド」「ダガ」「ダ／ナノニ」「ダト」などである。これらの「ダ」も述語の代用形と考えれば、「ダ」に、いわゆる接続助詞の「カラ」「ケ(レ)ド」「ガ」「ノニ」「ト」がついたものとなり、別に新しく接続詞の中に入れる必要がなくなる。接続助詞は単独では使えないから、補文を要求する。この場合の補文は、主語、述語の整った文でなくても、最少限、述語があればいい。接続助詞は文に続くのではあるが、直接には述語につくのである。しかもこの述語が前提されていれば、それを繰返さなくても、次のように「ダ」で代用することができる。「ダカラ」「ダケ(レ)ド」などは前提なしには意味不明となってしまつて使うことができない。

(5) (キノウハ 雨ガ 降ッタ)

ダ 降ッタ
カラ 練習ニ 行カレナカッタ

(6) (キノウハ 雨ガ 降ッタ)

ダ 降ッタ
ノニ 道ハ ソレホド 悪クナイ

(7) (アシタハ 雨ガ 降ル)

〔降ル〕
ダ ト 困ルナア

これについては、時枝（一九五〇）も「だが」は、先行文の陳述を「だ」で受け、それに助詞「が」の加わったもので……」
P. 168と述べているが、これは注目に値する。

このように、「ダ」が単独で補語もとらずに——つまり「ダ」の前の「ウナギ」もいなくなってしまうので、少くとも名称としての「ウナギ文」というのは誤解を招きやすい——使われるということも、他の説に対する反論の根拠となる。

（「国語と国文学」昭和56年5月号77～78ページ）

奥津も時枝も誤解している。もし、誤解でないのなら、強弁しているものと思われる。それは、「ダ」を「述語」とだけ関連させていることである。②において「ダ」は、(5)、(6)に「キノウハ雨が降ッタ」、(7)に「アシタハ雨が降ル」と前提が表現されているように「キノウハ雨が降ッタ」「アシタハ雨が降ル」という文をそのままうけ、次に続けていくもので、その全文を(5)を例にして述べれば、

(5) キノウハ雨が降ッタ。ダカラ、練習ニ行カレナカッタ。

となり、「ダ」は、「降ッタ」だけを代行するものではない。というのは、この「降ッタ」には、明らかに「キノウ」という時間的条件は欠かせず、この条件を無視する意味の続き方では、文が成立しないからである。

それは、(6)、(7)も同様であって、それぞれ「キノウ」「アシタ」という状況が含まれており動詞「降ッタ」「降ル」だけを代行するものではない。ところが、奥津は、「ダ」が補語もとらずに単独に用いられることに注目し、それを一般化

して、次のような変形規則を立ててしまふ。

③

ただ奥津（二たて）が不十分不徹底であつたと述べたのはこと点で、ウナギ文を、補語のない「ダ」型文——これを無補語ウナギ文と名づけておく——をも含めて一般化し、それを形式化しなかつたわけである。最終的な規則としては(1)までしか提示しなかつたが、これでは補語は必須の成分であるから、そのない「ダカラ」「ダケ（レ）ド」などを生成することができない。そこで小論では(1)を修正して次のような規則をたてることにする。

(8) 「ダ」による述語代用化（任意）

X Pred Tense □

X d Tense

但し Pred は前提がある。X は任意の数の連用成分。

つまりウナギ文にとって本質的な点は、述語が前提されているということ、その場合は述語をくりかえす必要はなく「ダ」で代用できるのであつて、その他の成分、つまり「ダ」の前の補語や、更にその前に分布する連用成分の存在は、ウナギ文にとって本質的な要件ではない。たしかに「AハBダ」というのが、ウナギ文または一般に「ダ」型文として、最も好まれ、かつ頻度も高い型であろうが、それが唯一の型であるときめつけてしまうと問題が生ずる。文法規則というものは、より一般性のあるものが可能なら、もちろんその方がいい。(1)の規則は制限が強すぎたのである。(8)の規則であれば、無補語ウナギ文から補語だけとするもの、更に一つあるいはそれ以上の連用成分をとるものまでを生成することができて、最も一般性の高い規則ということになる。Xにおける成分の数やその順序については、更にくわしく調べる必要があるが、「ダ」の本質という点では(8)の規則を一応最終的なものとしておきたい。

(1)の変形規則と、(8)のそれとどこに相違があるのだろうか。

$$XY \left\{ \begin{array}{l} NP \\ C \\ DP \end{array} \right\} = G$$

とすれば、(1)と(8)に本質的な相違はない。奥津は「一般性の高い規則ということになる。」と自賛するが、②の解説で述べたように、意味があいまいとなっていくだけ、かえって退歩であることは否定できまい。それについて奥津は、「Xにおける成分の数やその順序については、更にくわしく調べる必要がある」とそのあいまいさを自らも認めている。(8)は完全に、(1)の変形規則をばかしただけのものとして存在し、法則といえるものではない。

なお、「酒ノサカナハウナギダ」のような例は、奥津の論述からすると例外になるものと想定されるが、このような例は、「ボクハウナギダ」の法則に入らないとする変形規則を作らなくてはならないものと思われる。

④

ところで(1)の規則では「ダ」の前に焦点が置かれ、それ以外を前提と考えたのであるが、これも不徹底であった。修正版の(8)規則からは焦点ということばは抜けてしまっている。(8)によれば、補語はなくてもいいのだから、つまり「ダ」だけでいいのだから、当然焦点はなくてもいい。述語が前提されているということだけがウナギ文の唯一の要件であって、焦点の存在はウナギ文にとって必要な条件ではない。

焦点の有無、焦点の位置、焦点を表示する形式などは、「ダ」型文に限らず、動詞文についても、形容詞文についても言えることで、ウナギ文だけの問題ではない。言語行為というものは、原則として何か新しい情報を伝えるためのものだろうから、通常の文は、文全体か、その一部かに焦点があって、新情報を伝えるのだが、一方、文の中には焦点がないものも存在するわけで、それがウナギ文である場合もあり得る。上述の「ダカラ」「ダケ(レ)ド」の類がそれである。

「ボクハウナギダ」のように、「AハBダ」という単文構造であれば、「ハ」の前にある「A」が旧情報を担い、「ダ」の補

語である「B」が新情報を担う焦点である。しかし「AハBダ」という型だけがウナギ文ではない。

例えば、「ボク、ガウナギヲ食ベル」という文であれば、「ガ」の前にある主語の「ボク」が焦点なのであって、目的語の「ウナギ」は焦点ではない。従って「ボク、ガウナギダ」という場合も、「ボク」が焦点であって、「ウナギ」は焦点ではない。このことは奥津（一九七六）P.31でも指摘したのだが、この点を組入れ、(1)の規則を修正し一般化しなかったのは、やはり不十分不徹底であった。

この焦点が必ずしも「ダ」の前に来ない、ということとは、Muraki（一九七四）、川本（一九七六）も指摘している。川本の指摘するように、食堂でAが注文したウナギを、給仕人があやまってBの前に置こうとするような場面では、ウナギを注文したAは次のように言うであろう。

- (9) オイオイ、ボク、ガウナギダ

つまり誰かがウナギを注文したことはすでに前提されている。Aが給仕人に伝えたいのは、ウナギを注文したのが自分であることであって、「ボク」が焦点なのである。もちろんこの場合、前提されている「ウナギ」を主題とし、焦点である「ボク」を「ダ」の前に置いて、次のようにいうこともできる。

- (10) オイオイ、ウナギハ　ボクダ

要するに、ウナギ文に焦点は必ずしも必要ではないし、また焦点があったとしても、必ずしも「ダ」の前に置かれるとは限らないのである。「AハBダ」という型だけがウナギ文とは限らないのである。(8)の規則ならば、この点でも支障はない。

このようにウナギ文に焦点が必ずしも必要でないということ、また焦点があっても「ダ」の前に来るとは限らないということも、他の説に対する反論の根拠の一つとなる。

奥津が焦点を意図したがために論述がややこしくなったもので、奥津が最後にまとめるように焦点は特定できるものではない。それは、現在検討されている「ボクハウナギダ」から離れて、別のもの、例えば、

今日は雨だ。

を内省してみると、「今日」に焦点があるか「雨」に焦点があるか回答不能であることによってもよく分かる。

奥津の「ボクハウナギダ」の見解である①、②、③、④を検討して感じたことは、奥津は、「ボクハウナギダ」を特殊なものとして取り扱うが、「ボクハ病気ダ」とどこが異なるか理解に苦しむところがある。というのは「ボクハウナギダ」の場合「ダ」が述語代用として「ヲタベル」「ヲ注文スル」などの意味を持って文中に存在すると主張するが、「ボクハ病気ダ」もある場合は「ニ苦シム」「ヲ悲シム」のときがあり、いやな遠足に行かないですむ場合は、「ボクハ病気ヲ楽シンデイル」という意味になる場合があり、「ボクハ病気ダ」の「ダ」を指定・断定の助動詞にするならば「ボクハウナギダ」を同様のものと処理できるからである。

奥津の理論を拡大していくと「ボクハ奥津ダ」も「ボクハ奥津トイウ教授ダ」などという述語代用となるものと思われる。これは正常な文を理論のためにねじまげたもので、人間の意志疎通にこんな迂遠な道を通ることはなく、「ボクハ奥津ダ」で充分理解可能であり、奥津の理論の延長線上では、「ボクハーダ」は、すべて異様な文になるおそれがある。

3 I 述語代用説の疑問

奥津は、「述語代用説」に属するものとして、山田孝雄、金田一春彦、国立国語研究所名で示された鈴木重幸・南不二男、村木正武、久野璋などの説を提げる。以下、具体的にその内容を掲げ、疑問点を明らかにしてみよう。

⑤

まず山田（一九三）では、「ダ」を存在詞という特殊な語類に入れるのだが、この存在詞は「存在の義をあらはし、進みてはただ陳述の義のみをあらはす。極めて広き形式の下に陳述をなすものにして、如何なる属性をも予定することなく、ほとんどいっさいの用言の基本的部分を代表す」p. 270（傍点筆者）と説明される。山田はウナギ文を正面からとりあげているわけではないが、この定義はきわめて示唆的である。つまりウナギ文では、「食ベル」などの「属性」つまり語彙的な意味を持った述語はすでに前提されているのだから、それを省略してもいいのだが、「ボクハウナギ」だけでは、文を成立させる要件である「陳述」の宿るところがない。「ダ」は「属性」の意味はないけれども、すべての述語の持つもう一つの働き、つまり陳述性を持っているのだから、それを使って「ボクハウナギダ」とすれば、文として完全なものとなる。私が「ダ」を述語の代用形と考えるのも、「ダ」がすべての述語のもつ陳述性、しかもそのみをもっていると考えからである。

（「国語と国文学」昭和56年5月号80ページ）

⑤の記述は、山田の『日本文法学概論』（宝文館）によっている。山田は、ここで「ダ」を取り立て、特に「存在詞」と名称し、陳述の意味を持つとする。山田の学界に対するこれまでの影響力から、なんとなく納得してしまうところであるが、よく検討すると虚偽の論述をしているのではないかと疑われる。

すなわち、山田が規定した「ダ」の機能は「ダ」だけによって表されるものではなく、「デス」「デアル」「ヨ」「サ」などの助動詞や補助動詞、そして助詞によっても担われるもので、「ダ」固有の機能ではないということである。特に「ダ」は、単独では女性に絶対使用しないもので、このような「ダ」を、それだけに陳述があり、かつ「ほとんどいっさいの用言の基本的部分を代表す」とすることには従えない。陳述を用言にのみ求める山田文法それ自身の修正

が逆に求められるところである。

⑥

金田一（一九五）は、おそらくウナギ文を最も早くとりあげたものの一つであろうが、「君ハ何オ食ベル？」に対して「ボクハウナギヲ食ウ」と答へる代りに「ボクハウナギダ」と短く言」P. 188（傍点筆者）う、と述べている。「ダ」を述語の代用形と明言しているわけではないが、代用説への方向性は示されている。

国立国語研究所（一九六）は、鈴木重幸・南不二男の執筆だが、ウナギ文を「はしより文」と名づけ、「「ボクハウナギヲタベタイ」。「ボクハウナギヲ注文スル」。「ボクハウナギニキメタ」などの末尾の用言的な表現をはしよつた表現として起こる……」P. 168（傍点筆者）と述べている。これも「ダ」を述語の代用形と直接的に述べているわけではないが、「用言のはしより」という考えに注目すべきところがある。

（「国語と国文学」昭和56年5月号80～81ページ）

⑥の記述で注意すべきは、金田一の「君ハ何オ食ベル？」に対して「ボクハウナギヲ食ウ」と答へる代りに「ボクハウナギダ」と短く言」という記述で、奥津は「答へる代りに」に傍点を付けているが、併せて、下の「短く言」にも傍点を付すべきものと思われる。というのは、右の金田一の記述は、そっくりそのまま述語代用というのではなく、「ヲ食ウ」という長い述語部分を省略して、残った部分に「ダ」を添加し強調を図ったと考えられるからである。こういう考えの一つとして、国立国語研究所の「用言のはしより」という見解が出されるわけで、「ボクハウナギダ」と

ともに「ボクハウナギ」で通用可能な事実から、存在してもよいが省略するという「用言のはしより」説は一考に値する。ただし、「用言のはしより」方に「ボクガタベルノハウナギダ」の「ガタベルノ」という修飾語と称すべきものの省略もあり、簡単に省略を前面に掲げることが、問題が残る。

⑦

Muraki や久野は生成文法などの新言語学の側からの発言であるが、Muraki (1974) p. 45 はまず次のような contextual deletion という変形で、焦点でない——つまり前提されている——述語を消去し、後に copula attachment という変形で「ダ」を加える。

(11) Contextual deletion

[_s X₁ X₂ V₁] → [_s X₁ [_v X₂]]

where: a. V₁ contains no [+focus] element.

b. X₂ is a constituent, and a sister of V₁

c. X₁ = X wa

Note : optional

Muraki の場合、X₁ と X₂ を認めている点では、奥津 (一九七六) と同じく不十分不徹底である。つまり「ボクハ」のような主題と、「ウナギ」のような補語がこの規則では必須の成分になっている。

久野 (一九七六) は、談話 (discourse) の中での省略の問題をとりあげ、次のような「ダ」ストラテジーと呼ぶ省略規則をたてる。

- (12) 「ダ」ストラテジー (本動詞が復元可能な時のみに用いる) 復元可能な要素は省略する。残された要素に文の資格を与えるため、それを「ダ・デス」形の中に埋めこむ。 p. 8

最後の「ダ・デス」形の中に埋めこむ」という表現はいささかはっきりしないのだが、他のところでは、「ウナギダ」を、「必要最小限のインフォーメーション」「ウナギ」に、文としての資格を与えるため「ダ」が附加されて出来上った文である……」P. 92と言っているから、Murakiと同じく、まず前提されている復元可能な述語を消去し、次に「ダ」を加えるという二段の操作を考えているようだ。

（「国語と国文学」昭和56年5月81ページ）

③の解説で述べたように、Murakiの場合 X_1 と X_2 を奥津のように X でまとめると文全体の意味が不明となるわけ、これは、これをして逆に意義を持つものと思う。

久野は、本動詞が復元可能なので「ダ」を添加したとする。筆者の見解と近いが、「ダ」が添加したことによって、どのような意味内容をもって存在するのか検討がなく、未だしい感じを与える。

⑧

国広（一九〇）は、久野の「省略文説」を支持して「いちばん直観に近いようである」と述べている。しかし私は、Murakiや久野の省略文説も述語代用説と基本的にはちがいないと考えている。両者のちがいは、Murakiと久野は談話における省略に重点をおき、私は「ダ」の特性に重点をおいたところから出て来たのだらう。もちろん私も奥津（九七）P. 66、P. 67で「ボクハウナギ」のような述語省略文を認めており、この文の生成のためには、「食ベル」のような述語の消去、および「ダ」の消去のいずれをも認めた。

(13) a 君ハ 何ヲ 食ベル?

b ボクハ ウナギ

(14) a 君ハ 天プラカ

b イヤ、ボクハ ウナギ(ダ)

右の(13) b は、a に対する答えとして、「食ベル」が消去されたものと考えられるし、(14) b は、a の「ダ」型文の疑問文——終助詞「カ」の前では「ダ」は必ず消去される——に対する答えとして「ダ」が消去されたものと考えられる。

このようにいずれにしても消去変形あるいは省略は必要である。ただ問題を「ダ」とは何か、という観点から見るとき、やはり「ダ」は一種の述語代用形と考えられるのではない。Muraki や久野のように二段階操作をとるにしても、「ダ」は、復元可能なものとして消去された述語のあとに附加されるのであって、どこにでも附加されるものではない。消去された述語と「ダ」との間には特定の関係があることを認めざるを得まい。久野はこの「ダ」を、「文としての資格を与える」ものとして理解しているわけである。「文としての資格を与える」というのはどういうことか、くわしくは説明されていないが、文としての要件は述語の存在であり、ウナギ文の場合は、具体的な述語を示す必要がないので、述語性そのものを示す「ダ」を使うと理解できるのではないか。私はこのような「ダ」の性質からそれを述語代用形と考えたのである。奥津(一九七六) P. 20 は次のように述べている。

(15) 「ダ」型文と動詞文とは、「ダ」と動詞とを除いて、その構成要素は全く同じであり、その配列も全く同じで、ただ、

「ダ」の位置に動詞が来る点がちがう。そして一定のコンテキストがあれば、「ダ」型文は助動詞と同じ意味に理解される。このことから、「ダ」とそれぞれの動詞にはある対応関係があると考えられる。……(中略)……「ダ」はいわば動詞の

代用としての文の述部を成すのである。

一体、代用というのは何であろうか。John, Ted, a boy, a policeman などの名詞が、一定のコンテキストの中で特に繰返す必要がない時、日本語ならば通常は省略するのだが、英語では代名詞の *he* を使う。*he* はこれらの具体的な名詞に対応して、それらを指示しながらも、自らは男性・単数の名詞性というようなく一般の意味しか持たないのと、「ダ」とは似

ているのではないか。さきにあげた山田の、存在詞か陳述そのものを示すという説も、私は述語の代用に通ずると思うのである。

(「国語と国文学」 昭和56年5月号81～82ページ)

(13)と(14)は対比されるところのものしい感じを与えるが実質は同じである。

ここで注意しておかなくてはならないことは、(13)と(14)で奥津は、文末の「食ベル」の消去についてのみ論じるが、⑥の解説でも述べた、

(13) b' ボク(ガタベルノ)ハウナギ

(14) b' イヤ、ボク(ガタベルノ)ハウナギ(ダ)

も取り上げられるべきものと思う。それゆえ「(13) a」及び「(14) a」の前提に対して、常に「(13) b」「(14) b」の形式に一方的に連なるものとは思えない。だから、「(15)」の説明「その構成要素は全く同じであり、その配列も全く同じで、ただ『ダ』の位置に動詞が来る点がちがう。」は認められないことは、いうまでもない。

奥津は、⑧の最後に至って、完全な勇み足をする。それは、英語の代名詞 (Pronoun) と「ダ」を同一線上に理解しようとするが、例えば、英語の *he* は、第三人称単数という一定の条件を踏まえたもので、体言及び体言的なものと並びに体言化したもの(意味的にも極めて幅が広い)に等しく接続する「ダ」とは本質的に異なるからである。ここであるという体言的なものと並びに体言化したものとは、形容詞や形容動詞の語幹、副詞、引用された文や語句、指定の助詞の「の」などを指すが、日常しばしば使用される

「そうだよ。」

「言っただよ。」

という表現には、強調の意味が否定しがたく存在し、山田文法が述べる「陳述」のみを表現するものではない。

4 II ノダ説の疑問

奥津によれば、この「ノダ説」とは、エール大学の Martin が「A Reference Grammar of Japanese」(1975)で提唱したもので、モスクワ科学アカデミーの Vardul も同じだとしている。

⑨

II ノダ説

Martin は「ダ」を identification と propredication の二種類に分ける。同じ「雨ダ」という文でも、次の a は前者であり、b は後者である。

(16) a (ソレハ) 雨ダ

b 雨 (ガ降ッテイルノ) ダ

実は Martin が一九六四年にイエール大学からハワイ大学に出講していた折、私もその講筵に連った或る日、彼の研究室でウナギ文について話したことがある。彼の Propredication は日本語にすれば述語代用であろうが、結果としては私の述語代用説とはちがう説となっている。

つまり彼の説は「雨が降ッテイルノダ」という「ノダ」文から、「ガ降ッテイルノ」を消去して「雨ダ」になるので、代用ではなく消去である。Murakami や久野は、述語を消去したそのところに「ダ」を附加するのだが、Martin のは、はじめから「ダ」があつて、それが残つてウナギ文になるのである。

しかし「ノダ」の「ダ」は、ウナギ文の「ダ」とはちがうと思う。私は「ノダ」を文末詞（終助詞）の一つ——時枝式に言えバ辞——であり、ウナギ文の「ダ」は、動詞・形容詞などの代用なのだから、詞に属すると考えている。「ノダ」は従つて、動詞文・形容詞文・「ダ」型文のすべて——つまりウナギ文にも——つくのである。

(17) a ボクハ ウナギヲ 食、ベルノダ、

b ボクハ ウナギナノダ、

b に見るように、ウナギ文にも「ノダ」がつくのだから、「ウナギダ／ナ」の「ダ」を「ノダ」の「ダ」から説明するわけにはいかない。a と b を比べると、ウナギ文の「ダ」は、やはり「食ベル」と対応しているのである。従つて用語は同じ述語代用だが、Martin の「ノダ」説は妥当ではないと考える。

（「国語と国文学」昭和56年5月号82～83ページ）

⑨の identification とは「同定」であり、propredication とは「代用」と訳されるべきものである。そして、具体的には「(16 a)」と「(16 b)」を掲げる。奥津は、右の Martin の考え方を「雨が降ッテイルノダ」という「ノダ」文から「ガ降ッテイルノ」を省略したウナギ文と理解し、本来のウナギ文ではないとする。奥津は、併せて「ノダ」文の「ノダ」は、終助詞であり時枝文法の辞で、奥津の主張するウナギ文の「ダ」は、動詞や形容詞の代用なので、時枝

文法の詞に種類分けする。

ここでの Martin 及び奥津の論述の疑問点は「ノダ」又は「ナノダ」という語句の意味とそれが入ってくるプロセスについて一顧もされていないことである。なぜ、「ノダ」「ナノダ」が添加されるか、「ナノダ」の場合を例に考えてみよう。国語では、例えば、他人の要求を拒否する場合、まず、「ダメ」若しくは「ダメヨ」といい、その意志をより強めると「ダメダ」「ダメダヨ」となる。この強調を柔らかに表現するとき「ダメナノダ」「ダメナノダヨ」となるもので「ナノ」は、完全にあとから付け加えられたものである。これは「ノ」の場合も同様で「(17) a ボクハウナギラ食ベルノダ」において、この「ノダ」は、強調を柔らかに表現することを意図して用いられたものであることは疑いない。

それゆえ、Martin が⑨で「(16) b 雨〔が降ッテイルノ〕ダ」を前提とすることさえ国語としては、本末転倒で、逆に「雨ダ」という至極自然な文から「(16) b」が成立するものと考えるべきであろう。

なお、「ノダ」「ナノダ」や「ンダ」「モノダ」「モンダ」について、吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』(明治書院)では、

その事態を説明的に言い切ったり、原因・理由付けをしていたり、習慣的事実を述べたりするのに用いる。単なる描写や断言ではなくて、解説的、説得的表現である。(同著 379 ページ)

として

○「奥さんは君の事を心配して来られたのだ。」(森鷗外『仮面』)

○「お前が立派な人間になってくれるのが私のたった一つの望みなのだ。」(武者小路実篤『幸福者』)

などの例を掲げている。以上の例をみても、「ノダ」「ナノダ」と「ダ」は完全に異質であって、それが省略されて、「ダ」となったと考えるのは、国語の語感を知らないものと判断できる。

5 III コピュラ説の疑問

池上嘉彦「『する』と『なる』の言語学2」へ『月刊言語』昭和52年10月号、仁田義雄『語彙論的統語論』（明治書院）などが提唱するもので、伝統的なコピュラ概念から「ウナギ文」を理解しようとするものである。これによって、

東京ハ日本ノ首都ダ

の「ダ」と「ウナギ文」の述語代用形の「ダ」が同じものとなる。

この「コピュラ説」は、次のように説かれていく。

⑩

III コピュラ説

まず池上は、ウナギ文を場所理論 (localist theory) の枠組の中でとらえる。彼は「ダ」を「デアル」に分解し、「デ」は近接関係 (WITH で表わす) を意味し、「アル」は存在 (BE で表わす) を意味し、「ダ」型文は次のような型となる。

(18) Y BE WITH X

つまりYとXの二項が、場所的・時間的その他何らかの近接関係にあることを意味するのであり、両者がどんな近接関係にあるかは、文脈にゆだねるというのである。「ボクハウナギダ」も、「ボク」と「ウナギ」とが何らかの近接関係にあることを意味するもので、「ボクハウナギヲ食ベル」のか、「ボクハウナギヲ釣ル」のかなどの意味は文脈にゆだねるのである。

仁田は「ダ」を包摂または同一を表わすものとし、「ダ」型文は次のように表示する。

(19) X/Y

ウナギ文の場合、「ボク」と「ウナギ」とが直接に同一または包摂関係にあると言えないから、「ボクが注文スルモノハウナギダ」と解釈し、「ボクが注文スルモノ」と「ウナギ」とが同一関係にあると考えるようだ。するとこれは第四の分裂文説に似て来るが、仁田の場合は、分裂文を基底におき、それからウナギ文を導くというような変形操作は拒否しているようでもある。仁田は「聞き手の文法」とでもいうべきものを意図しているようだが、聞き手として文を解釈するにも、話し手が文を生成する規則を含んでいるはずである。話し手と聞き手の両者に共通の規則があり、それに聞き手に特殊な規則が加わって解釈が成りたつのである。また仁田は「談話の文法」を主張し、述語代用説は「文の文法」にすぎないと批判している。たしかに述語代用そのものは「文の文法」の規則だが、それが談話の中の一定の前提のもとで行なわれると説くことから、談話構造の中の「文の文法」であることは明示されている。久野の省略説というのも、正に『談話の文法』という書物の中のことである。池上のように「ダ」が近接関係を表わし、仁田のように「ダ」が同一ないし包摂関係を表わすとすれば、ウナギ文にとって、XとYという二項がどうしても必要になる。ところが、すでに述べたように、ウナギ文は二項以上をとる場合もあるし、一項の場合もあるし、項目ゼロの場合もある。コピュラ説ではこの現象を説明できない。コピュラ説は、やはり西洋論理学や西洋文法の枠組の中で「ダ」をとらえようとして、「ダ」が持っている日本語独特の性質を見ていないと言うべきではなからうか。

川本（一九七）もコピュラ説のようである。川本は「象ノ鼻が長イ↓象ハ鼻が長イ」になぞらえて、次のような課程を考えている。

(20) ボクノ（アレガ）ウナギダ↓

ボクハ（アレガ）ウナギダ↓

ボクハ ウナギダ

つまりはじめから「ダ」をおいているから、コピュラ説のように見えるが、コピュラとは何か、「ボクノアレガ」というのは何か、などについてのくわしい説明がないので批評しにくいところである。

（「国語と国文学」

昭和56年5月号 83～84ページ）

池上説の第一の疑問は、構造からみて、

(18) Y BE WITH X

と「ハーデアル」という日本語の文章に連結しないことである。すなわち、池上の「(18)」のXとYは、完全に英語的配置であって、日本語の文構造ではないということである。また、池上は、あくまで近接の関係を主張しているだけで、同一の関係、例えば、この項の冒頭に掲げた、

東京ハ日本ノ首都ダ

の場合は、別のものとなることは、指摘しておく必要がある。

一方、仁田は、池上説が持たなかった「同一」の関係も明示して、

(19) X IN Y

としている。これは、池上説を補正したものと考えられるが、池上が⑩で「XとYの二項が、場所的・時間的その他何らかの近接関係にあることを意味するものであり、両者がどんな近接関係にあるかは、文脈にゆだねるというのである。」と述べたように、仁田説でも「同一」と「近接」は、文脈によるものであり完全には把握しがたいという欠陥がある。というのは、国語で「ボクハウナギダ」が成立する原因は、文法に従ってというよりも、あくまでも心理的前提によってもたらされるからである。

より具体的に述べれば、英文の場合、「ボクハウナギダ」と表現するとき、「食ベル」などという述語のプロセスが必要であるが、国語の場合、述語部分「食ベル」「注文スル」などは、「ウナギ」という目的語を掲げること、話し手聞き手の間にあっては、一瞬で理解される心理的融通性が存在することは否定できない。ここにおける「ダ」とは、目的語を掲げるだけでは心理的に安定しがたいため、配置されたもので、動詞の代行、ノダ説、コピュラ説、⑪以下に展開される分裂文説などのいずれとも異った実質をもって存在していることは確かである。奥津が池上、仁田の両

説を、国語独特の性質を見ていないということでは否定しているが、奥津とは別の理由で、奥津の見解を支持するものである。

川本は、「象ノ鼻が長イ↓象ハ鼻が長イ」に準じて、

(20) ボクノ(アレガ)ウナギダ↓

ボクハ(アレガ)ウナギダ↓

ボクハ ウナギダ

とする。右の「(アレガ)」とは「食ベル」「注文スル」などの動詞であろうが、この場合、

(20') ボク(ノアレ)ガウナギダ

という「(ノアレ)」を省略する形式を経過しなくては納得しがたい。「(20)」の範囲では恣意的である。

6 IV 分裂文説の疑問

林大や北原保雄「奥津敬一郎『ボクハウナギダ』の文法』の書評」へ「国語学」120集が提示する考え方である。北原は、ここでの奥津の批判を受けて、改めて「うなぎ文の構造」(『日本語の文法』へ中央公論所蔵)と題して、自説の補強をしている。ここでは、奥津説をまず取り上げ、必要に応じ、北原説にふれてみよう。

⑪

IV 分裂文説

分裂文 (cleft sentence) という用語は、イエスペルセンがはじめたというが、Jespersen (1937) では、次のbのような文を

分裂文とする。

(21) a The wife decides.

b It is the wife that decides.

aは原文であるが、bは、それを二つの部分に分けている。これは聞き手の注意をaの文の一部分——上例では the wife——に向けさせるためと構文であると説いている。

更に Rosenbaum (1967) は、次のbを擬分裂文 (pseudo-cleftsentence) と名づけた。

(22) a I hate you to do things like that.

b What I hate is for you to do things like that.

以後、分裂文と擬分裂文とをめぐって、生成文法の中では、多くの対立する説が出されて百家争鳴の観がある。今はこれら諸説を紹介する余裕はないが、日本語に対応するものがあるとすれば、擬分裂文の方であり、分裂文にあたるものは日本語にはないであろう。それに、果して日本語に擬分裂文といえるものがあるかどうかから、まず検討する必要があるうし、また、それがあったとしても、英語と同じ性質をもったものかどうか、日本語の擬分裂文はどのような構文的意味的特色を持っているだろうか、などについての十分な研究はまだない。英語についても多くの論争を経て来ているのだから、日本語についても簡単に結論が出そうもない。私自身もその準備もないし、私に与えられた紙数でここに論じつくせるものでもない。ただ次のa、bの二つの文は、知的意味が同一であるし、何らかの関係があることはまちがいない。

(23) a ボクハ ウナギヲ 食ベル

b ボクガ 食ベルノハ ウナギダ

⑪の論述は、分裂文という構文があるという紹介で、国語にあるという擬似分裂文がどのように展開するか不明である。

しかし、⑪の最後に掲げられている、

(23) a ボクハ ウナギヲ 食ベル

b ボクガ 食ベルノハ ウナギダ

と⑩の「(19) XIVY」で仁田が述べる「ボクガ注文スルモノハウナギダ」と比較すると全く同じであり、ことあらためて分裂文説を特立する必要性はなく、分裂文説は、仁田説で処理できると判断される。なお、奥津は、分裂文という考え方の欠陥を次のように指摘していく。しかし、奥津自身の論述の問題点もあり、分裂文に対する奥津の批判のすべてを掲げてみよう。

⑫

分裂文——以下擬似分裂文を単に分裂文と呼ぶ——は通常次のように定義される。

(24) 「Sノハ Xダ」という形をとる「ダ」型文で、前提とされる文(S)を名詞化して主題とし、焦点であるXを「ダ」の前に置く文

つまり(23)bのように「ボクガ何カヲ食ベル」ことは前提となっており、焦点が「ウナギ」であるような文が分裂文であると一応考えられる。この点については「ボクハウナギダ」も似たところがある。「AハBダ」という形で、Aである「ボク」が前提のある旧情報を表わし、Bの「ウナギ」が焦点として「ダ」の前に置かれている。しかしだからといって、直ちにウナギ文が(23)bのような分裂文から派生されるということとはできない。分裂文説には次のようないくつかの難点がある。

第一に、分裂文説は次のような消去変形をたてることになるであろうが、この変形は不自然である。

一方、奥津のこれまでのような指摘に対し、北原は、

たしかに、「が食べるの」はまとまりの悪い成文であるかもしれない。しかし、すでにいくつかの具体例を示したように、
 ぼくが食べるのは◇ぼくのは◇ぼくのは◇ぼくは
 のような変形を考えれば、すなわち、「が食べるの」が「のの」（上の「の」は連体助詞、下の「の」は準体助詞）に置き換えられ、その「のの」が「の」に置き換えられ、さらにその「の」が消去されるという変形を考えれば、「ぼくが食べるのは」が「ぼくは」となるのは、決して無理なことではない。変形の不自然さということ言えば、述語代用説の変形の方にこそ、むしろ無理があるといわなければならない。

（『日本語の文法』295ページ）

と反論する。この内容は、反論としてはまとまりが悪く、もつと具体的に、例えば「質問の答えとして存在しているので、重複を避けるために」などと表現して欲しいところである。実際「ボクハウナギダ」そのものだけでは意味をなさず、前提条件の存在は、必至であり、それを無視して論述は、進められないものと思われる。奥津も北原も、実際の文脈を無視した論述をするがために、素直には読み取れない記述となったのであろう。

⑬

第二に、すでに述べたように、ウナギ文で「ダ」の前に来る成分は焦点とは限らない。「ボクガウナギダ」のように、主語が焦点であるものもある。ところが分裂文はその定義からして——(24)の定義が妥当なものならばの話だが——焦点は「ダ」の前に置かなければならない。

「ボクがウナギダ」は、「ボクが食べたいノガウナギダ」という文からの派生だという議論もできようが、これは分裂文であるかどうか疑わしい。今は詳論できないが、ここまで分裂文の定義を拡大するとまた問題が生ずる。

(「国語と国文学」昭和56年5月号86ページ)

すでに、④の解説部分でも述べたように、「焦点」という考え方は、日本語の場合、極めてあいまいであり、理解の仕方によって、変わってくる。例えば、「ボクハウナギダ」は、「ボク」にも「ウナギ」にも焦点があると考えられるもので、それを一方に決定しようと論じて仕方がない。よって⑫に掲げられる「焦点」についての定義そのものに疑問がある。

これに対し、北原は、「ボクガウナギダ」は、一つの特例として、次のように述べる。

ぼくが うなぎだ。

のように、「ぼく」の方が焦点であるものもある。ところが、分裂文では、焦点は「だ」の前に置かなければならない。この矛盾をどうするか、というものである。しかし、これは、奥津自身が提示しているように、「ぼくはうなぎだ。」の場合同様に、

ぼく「が食べたいの」が うなぎだ

□

ぼく

が うなぎだ

という変形を考えれば、それでいいわけである。これは、たしかに、これまで見てきた「AはBだ」という分裂文ではないが、このような表現があるからといって、分裂文説が否定されることには毛頭ならない。

(『日本語の文法』299ページ)

北原が掲げる「ぼくがうなぎだ。」にも、何らかの省略があることは確かである。北原は「ぼく〔が食べたいの〕がうなぎだ。」とするが「ぼく〔は食べたいの〕がうなぎだ。」とすることも可能で、表面的には「が」となっているが、内容としては「は」と理解されてもよいものが、前提条件とそれを踏まえた省略の仕方 で存在し得るものと思われ、「ぼくがうなぎだ。」も可能であると判断される。ただし、これらは、いずれも、「Ⅲ コピュラ説」すなわち繫辞文であることは疑いない。

⑭

第三に、ウナギ文は、二項目だけでなく、次のように三項目あるいはそれ以上の成分をとることが可能である。

(26) (君ハキノウ何ヲ食ベタ?)

ボクハ キノウ ウナギダッタ

ところが分裂文はその定義からして主題と焦点という二つの成分から成るものであり、次のような分裂文は許されまい。

(27) *ボクガ 食ベタノハ キノウ ウナギダッタ

またこれもすでに述べたように「オヤ、雨ダ」のような、主語あるいは主題のないウナギ文も可能であるが、分裂文は、定義からすれば主題をとる。もっとも、主題は前提されている旧情報を示すのだから、次のように、主題の消去によって「雨ダ」を派生することは可能である。

(28) 降ッテイルノハ 雨ダ↓

雨ダ

(「国語と国文学」昭和56年5月号86～87ページ)

まず、⑭の「(26)」において、「キノウ」は、どこに配置されても、文として成立するもので、このような「キノウ」を「ボク」や「ウナギ」と同じレベルで取り扱うことに疑問がある。

また、「(27)」は、奥津は成立しないとするが、現実の発話には、しばしばみられると思われる。それは、

(27)' ボクガ 食ベタノハ キノウハ ウナギダッタ

の「キノウハ」の「ハ」が省略されたものとして使用されるからである。なお、「キノウハ」も、文における位置は、自由であることは、言うまでもない。この場合、「キノウハ」の「ハ」は、「ボクハ」の「ハ」と等しく「昨日の場合」は」という意味を持つ。それゆえ、「(27)」は、北原がいう分裂文の一種として存在し得るものと思われる。

この奥津の批判に対して、北原は、次のように述べている。

たしかに、分裂文は、主題と焦点の二つの部分からなるものである、しかし、焦点が一つの成分でなければならないということはない。たとえば、

(1) 昨日 寿々喜で ぼくが 友人と うなぎを 食べた。
 という文からは「寿々喜」はうなぎ屋の名

(2) 昨日 ぼくが 友人と 食べたのは、寿々喜で うなぎだ。

(3) ぼくが 友人と うなぎを 食べたのは、昨日 寿々喜でだ。

(4) 昨日 ぼくが 食べたのは、友人と 寿々喜で うなぎだ。

(5) ぼくが うなぎを 食べたのは、昨日 友人と 寿々喜でだ。

のような分裂文を派生することができる。分裂文は、新しい情報に焦点をおくものであるから、それは単一である方がすっきりする。しかし、焦点の部分が二項目(二成分)以上からなっているても、論理的に決しておかしくないし、事実、右掲のような分裂文は、自然な表現として認められるものであろう。

(『日本語の文法』 300～301ページ)

北原は、右の(2)～(5)を分裂文という。しかし、強弁以外の何ものでもない。少なくとも⑪に示された英文の場合、また、⑫の定義の範囲の内にあっては等分裂文の内容は、「あれか、これか」でなくてはならないのに、ここでは、「あれか、これか、それか」又は「あれか、これか、それか、どれか」と称すべきものになっている。このような(2)～(5)を統一的に把握できる考え方は「IIIコピュラ説」に掲げられている「ハーダ」という繫辞文である。

なお、(2)～(5)までの用例は、あくまでもその一例であって、例えば、

(5) うなぎを 食べたのは、僕で 昨日 友人と 寿々喜で だ。

のように多数の類例が考えられるが、それがすべて同等に取り扱われるものか、意味が完全に異なったものとなり、極めて疑問である。また、北原が並べる「昨日」「友人と」「寿々喜で」を同格と考えているようであるが、果して同格とすることができるか疑問が残る。

⑮

第四に、これもすでに述べたように、「ダカラ」「ダケド」のような補語をとらないウナギ文もあるが、これは分裂文の定義からして派生できない。分裂文では「ダ」の前に置かれるのは焦点だから、主題を消去することはできても、焦点を消去することは許されまい。

(「国語と国文学」昭和56年5月号87ページ)

奥津の指摘のとおりであろう。ただし、②の解説で述べたように、「ダカラ」「ダケド」には、奥津のいう補語だけではなく、それにかかわる前提条件のすべてが包含されていることは、忘れられない。このことについては、北原も意見を等しくし、次のように、まとめている。

(昨日は 雨が 降ったらしい。
 { 降ったらしい } け (れ) ど すぐに 晴れたそうだ。
 { だ }

などのように、「だ」は、奥津のいわゆる時制詞 (Tense) や判断詞 (Confirmative) をも含めて代用することになってしま
うが、これは、「だ」は時制詞や判断詞を代用することができないとする述語代用説にとつては、はなはだ不都合なことはず
である。時枝誠記が、「だが」は、先行文の陳述を「だ」で受け、それに助詞「が」の加ったもので……」（『日本文法 口語篇』
一六八ページ）と述べたのは、述語を代用するというような部分的なものではなく、先行文全体を接続内容として受けること
をいっているのである（なお、接続詞については本書一九四ページ以下参照）。奥津は、「接続助詞は文に続くのではあるが、直
接には述語につくのである。」と述べている。これは、いい方を変えれば、接続助詞は、直接には述語についているが、文に続
くものであるということである。つまり、奥津も、接続助詞が述語に直接に接続しているのは形態上のことで、構文的には文
に続くものであることを認めているのである。それを、構文的にも、接続助詞が述語の「だ」に続いてるように説明するの
は、論理のすりかわりである。このすりかわりから、「だから」や「だけ（れ）ど」などがうなぎ文の一種だというような誤つ
た結論が導かれることになる。

（『日本語の文法』305ページ）

なお、右に掲げられている「だけ（れ）ど」の「だ」の本質は、「昨日は雨が降ったらしい」全体をうけて、後ろに
続けていく役目をもつので繋辞的な役目をもって存在しているということは、指摘し得よう。

⑬

第五に、「君ハ何ヲ食ベル？」のような質問に対しては、「ボクハウナギヲ食ベル」と答えるのが自然で、「ボクガ食ベルノ
ハウナギダ」と答えるのは特殊な場合であろう。従つてこのような場合は、「食ベル」の代りに「ダ」を使ったのが「ボクハウ
ナギダ」であると考える方が自然であろう。

但し、「君が食ベタイノハ何ダ？」というような分裂文の疑問文に対して、「ボクハウナギダ」と答える時は、分裂文からの派生のようにも考えられる。

（「国語と国文学」昭和56年5月号87ページ）

奥津の論述のとおり、「君ハ何ヲ食ベル？」という質問ならば、「ボクハウナギヲ食ベル」という応答になろう。しかし、それを「ボクハウナギダ」と答えた場合、「ヲ食ベル」の代行とか、省略とかいうものではなく、「ダ」は「ダ」として強調という固有の意味を持って存在しているものと思われる。というのは、「ボクハウナギダ」又は「ウナギダ」という応答があった場合のその質問とは、奥津が主張する「君ハ何ヲ食ベル？」などというものではなく、北原のいうように「何ダ」↓「ウナギダ」という構造になるものだからである。この事実は、奥津も認め、⑬の後半部分のうに「君が食ベタイノハ何ダ？」という分裂文の疑問文を掲げているのであろう。ただし、このような質問のもとに生まれる「ウナギ文」である「ボクハウナギダ」は、「吾輩は猫だ」「私は山田だ」の「だ」と何ら変わりはなく、指定・断定の助動詞「ダ」と種類分けてきよう。

北原は、この問題に関し、次のように述べている。

文法研究において、言語的直観(intuition)は尊重されなければならない。そして、奥津のような述語代用論者の言語的直観においても、分裂文からの派生と認められるような場合があるということは、分裂文説にとって、きわめて力強いことである。そして、前者のような場合でも、「君は何を食べる？」という質問に対して、「何を食べるかって？ぼくが食べるのはうなぎだ。」というように答えるのは、そんなに特殊ではないのではないか。しかも、「ぼくが食べるのは」のように分裂文の主題をそ

のままに詳しく表現するから変になるのであって、だからこそ、普通には「ぼくは」と省略した形を用いるのである。「ぼくは」と短くしても、「ぼくが食べるのは」の意味に解することができるという事実は、分裂文説の有力な根拠となるものである。

(『日本語の文法』306ページ)

北原の言語的直観について疑問のどころである。まず、北原はここで「君は何を食べる？」という質問に対し、「何を食べるかって？ ぼくが食べるのはうなぎだ。」とする。しかし、国語として、この応答を考えると、「ぼくが食べるのはうなぎだ。」ではなく、「ぼくが食べたいのはうなぎだ。」となるべきものと思われる。それを北原は、省略して「ぼくはうなぎだ。」となるとするが、これは、質問事項を完全にあいまいにした表現で、「食べる」との関連が稀薄となる。なお筆者が掲げた「ぼくが食べたいのはうなぎだ。」は、「Ⅲ コピュラ説」の中に含まれると思われる。では、「ぼくはうなぎだ。」という回答が出て来るメカニズムは、どのようなものであろうか。ここで北原が記述しているような単純な一方向のものとは思えない。北原の分裂文でも、奥津の述語代用でもないというのが、筆者の言語的直観である。というのは、⑬の解説に述べたように「ぼくはうなぎだ。」には強調の語感が明らかに流れているからである。

⑬

第六に、分裂文自体がウナギ文と思える場合がある。

(29) 隣ニ坐ッテイルノハ ウナギダ

右の文は二義ある。第一の読みは、お伽噺の中で、「ウナギが隣ニ坐ッテイル」という文を、分裂文にしたものである。第二の読みは「隣ニ坐ッテイル人ハウナギヲ食ベル」のような場合である。つまりこの分裂文自体がウナギ文であるから、この分裂文からは「ニ坐ッテイルノ」を消去しても、第二の読みは出て来ない。従って分裂文からウナギ文は説明できない。

もつとも、この第二の読み、の場合の(29)の文は分裂文でないとすれば——外形は分裂文であるが——話しは別であるし、私もこれを分裂文としない方がよいと思う。

以上六つの点をあげたが、分裂文説にはこのような難点があるから、非分裂文からウナギ文を派生させる述語代用説の方が妥当ではないかと考えられる。

もつとも、これは、分裂文を(24)のように定義してのことであり、この定義の妥当性について更に検討の要があろう。分裂文について、いずれ機会を見て発表したいと考えている。

(「国語と国語学」昭和56年5月号87ページ)

北原の意見は、次のようなものである。

(e) 隣に坐っているのは うなぎだ。

という文には二義がある。第一の読みは、お伽噺の中のようなことで、「うなぎが隣に坐っている。」という文を分裂文にしたものである。この場合は問題がない。第二の読みは、「隣に坐っている人はうなぎを食べる。」のような場合である。この場合、分裂文自体がうなぎ文であるから、この分裂文からは、「に坐っているの」を消去して、

(f) 隣は うなぎだ。

としても、第二の読みは出てこない。したがって、分裂文からうなぎ文は説明できないというものである。

(f)の文は、奥津の言にもかかわらず、第一の読みにも第二の読みにも読めるようである。しかし、そのこと以前に、(e)の文

は、第二の読みになる場合、決して分裂文ではないのである。いわば、繫辞文である。分裂文の場合ならば、すでに繰り返し述べたように、「隣に坐っている」と「うなぎ」との間に論理的関係が認められるはずである。第一の読みの場合は、「うなぎが」「隣に坐っている」という論理関係が認められるから、これは分裂文である。しかし、第二の読みの場合、「隣に坐っているの」は「隣に坐っている人」の意で、「ある人が隣に坐っている」というのであり、「隣に坐っている」と「うなぎ」との間には、直接の論理関係はないのである。

隣に坐っているの（人）が食べるのは うなぎだ。

が、第二の読みの場合の分裂文である。こういう分裂文でない例を持ち出してきて、「従って分裂文からウナギ文は説明できない。」などと断じられるのは、分裂文説にとつては、とんだ濡れ衣で、はなはだ迷惑なことである。しかも、すぐ次の行には、「この第二の読みの場合の(e)の文は分裂文でないとすれば——外形は分裂文であるが——話しは別であるし、私もこれを分裂文としない方がよいと思う。」と述べられている。つまり、奥津自身が撤回しているのであるが、「しない方がよい」というようなものではなく、第二の読みの場合の(e)の文は、分裂文でないことが明々白々なのである。

（『日本語の文法』307～308ページ）

ここには、奥津の欠陥を追求するに急で、北原説の持つ弱点を完全に忘れている。まず例文(e)を素直に国語として理解すると、「隣に坐っている人は、本当は人間ではなく、うなぎが化けているものだ。」という意味になる。これは、奥津のいう第一の読みと同じであろう。例文(e)からは、それ以外の読みは成立しない。ここで、第二の読み「隣に坐っている人はうなぎを食べる。」という内容のものであるならば、この例文(e)は、北原の解説にもあるように、

(e) 隣に坐っている人は うなぎだ。

とならなくては、国語として正確ではない。例文(e)のような極めてあいまいな例を取り上げて論義を進めるのは、自分の学説だけのために、国語をねじまげているのか、奥津、北原とも本当の国語を使用できなくなったためなのであ

ろう。このような例文で論義をすることは、国語そのものを悪くするものであり、国語学者と称する人のとるべき道では決してない。

7 「ウナギ文」とは呼応文

これまでみてきたように、奥津が整理した「ウナギ文」についての四種の理解のすべてに疑問点が指摘できる。それは、そこで展開されている論述が「ウナギ文」の実際の在り様を説明していないからである。では、「ウナギ文」とは、どのような文なのか、ここで改めて筆者の見解をまとめておこう。

「ウナギ文」とは、「吾輩は猫だ」「私は山田だ」と「ボクハウナギダ」「ボクハスシダ」の両者を対比すると「AハBダ」という形をしている点は同じであるが、「A」と「B」との関係が全く異なるところから出発している。すなわち、これを英訳した場合、前者は、「I am a cat」などとなるものだが、後者は、そのようにならないところに相違がみられる。なぜ、そうなるかという原因を追求し、奥津が整理するように「I述語代用説」「IIノダ説」「IIIコピュラ説」「IV分裂文説」の四種がその説明の学説として提案されてきたものである。

ここで忘れてならない第一点は、①の解説で――、奥津が「例えば『君ハ何ヲ食ベル?』のような前提があれば『ボクハウナギヲ食ベル』と答えるかわりに『ボクハウナギダ』で済む。」と述べるように、「ウナギ文」は、常に前提条件があるということである。ということは、「ウナギ文」は、話し言葉、書き言葉の相違はあっても、質問に対する呼応文として存在していることである。第二に「ボクハウナギダ」という文を内省してみると、まず、「ボクハウナギ」と「ダ」に分離できるもので、前者の「僕の場合（食ベル、注文スル）などはうなぎ」という意味を後者の「ダ」で強調していることがよく分かる。それは、①の解説部分でも少しく触れたが、述語の代用とか、省略とかの

範疇にあるものではなく、「君ハ何ヲ食ベル？」という質問に対し、「ボク」という主語、「ウナギ」という目的語に係助詞の「ハ」で結合し、質問の回答として、見極めのつく範囲の意味内容を構築し、それを確認するために、「ダ」をあえて添加したものと判断できる。ここで「ダ」をあえて添加したとするのは、「ヨ」「デス」「○」などでも使用可能であることを意味するが、この「ダ」は、質問に対する呼応として、述語の意味を含むとともに、それを跳び超え、これまでの質問とそれに対する回答の両者を結び付ける機能をもって存在している。これは、国語の助動詞「ダ」の用法の一つであって、次の指定・断定の助動詞「ダ」と同一線上にあるものである。ここでの「ダ」は、「何だい」という質問の回答であるとともに、質問の中にある「あの婆アたち」を回答の中に主語として含んで表現したものであることは確かである。

○「何だい、あの婆アたちは？」

「シーツ。落ちぶれた華族だよ、みんな。」

(三島由紀夫『女は占領されない』)

〈吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』〈明治書院〉377ページから〉

8 日本語と国語

「ウナギ文」論争とは、国語をわざと誤解し、西欧文法の原理をあてはめようとしたものである。ここに登場するすべての論者たちには、西欧文法の原理で、国語が把握できれば、日本語の文法が進歩するとの先入観が流れている。このような状況は、——、論者たちが、日本語という言語を内なる言葉として理解するのではなく、その論述に「国語」という術語を拒否し「日本語」とするように外なる言葉として客観的に検討しようとするところからまた

らされたもので、それが学問的であると信じているためであろう。

このような姿勢での学問的成果が国語の実態を説明し得るものであったならば、その研究推進の意義は認められるが、現状は未だしというよりも、国語を誤解し、自説のために、国語をねじまげているような感じでもある。もし、ここで、論者が日本語を内なる「国語」として意識し、自らの親しみ深い言葉として「ウナギ文」に接したならば、ここでの論争は存在さえしなかったであろう。

「国語」には、「ウナギ文」にみられるような、西欧文法の原理では処理しがたい「国語」の論理が厳存する。それは、善悪を超えた問題である。われわれは、「ウナギ文」にみられるような「国語」の特質をよく理解し、それをよい性質として利用し、われわれの「国語」の文法を簡潔なものとすることができれば、すばらしいことであるとともに、そうなるように努力すべきものと信じる。

(以上)